

中国内モンゴル自治区における民族教育の現状 —都市部のモンゴル家族の生活実態を中心に—

ソ・ロ・ン・ガ

はじめに

グローバリゼーションの進行に伴い、人々の移動が活発化してきたことにより、民族・宗教・言語・文化の相違による対立・紛争がますます激化している。21世紀に、人類が平和に共存するためには、異文化理解、国際理解をより一層推進することによって、言語・文化を異にする諸民族が相互に違いを認め、人権を尊重する多文化共生社会の実現を目指すことが求められている。そのため1970年代以降、多くの多民族国家において、新たな社会統合の理念として多文化主義が提唱されてきた。

中国は55の少数民族を含む多民族国家であり、国家の中にも世界が存在していると言ってよいほどである。多数の少数民族を含んでいる中国の教育においても、多文化共生への教育をいかに実現していくかが大きな課題であると考える。中国は「民族平等」という理念を掲げている。その「民族平等」とは、第一に少数民族の社会参加に関する権利の平等、第二に少数民族文化の言語・文字・習慣・宗教信仰の尊重をも内容としている（張瓊華1998：212）。つまり、「民族平等」とは、権利の平等という意味だけではなく、各民族文化の尊重と共生という意味をも含んでいる。しかし中国は現在、漢民族が圧倒的多数を占めるため、少数民族の文化が必ずしも尊重されているとは言えず、各民族文化の共生までには至っていないのが現実である。

中国では、1990年代から、今までの教育に対する政策、方針の見直しが行われた。「科教興国」（科学技術、教育で国を発展させる）や「人材強国」（人材が豊富な国）などのスローガンからもある程度解るように、国家戦略の一環

として高等教育が重視されてきている。高等教育における方針転換は、ある意味で「エリート教育」から「大衆教育」へ向けての変化でもある（思沁夫2004：151）。

しかし、全国の大学の進学率が高くなつたのに対して、内陸部の少数民族地域では、教育方針の転換によって、民族学校への進学率はますます低くなりつつある。民族語を話す人々が少なくなり、民族学校も減少しつつあるのが現状である。

これまでのモンゴル研究は、国際的には、チンギス・ハーンや蒙古帝国の歴史、遊牧民の文化などの分野が多い。近年は、中国少数民族教育に関する研究は増えつつあるが、言語学、教育学、社会学からアプローチした、教育政策や教育方法を論じる研究が比較的多い。多文化共生の視点からみた研究は最近になって始まっている。その始まりは1980年代末に費孝通が、香港の中文大学で行った講演で「中華民族多元一体」と発表したことである。中国に住んでいる各民族全体をひとつの大きな民族であると主張し、その中の56個の諸民族を「多元」、中華民族を「一体」として捉えている（費孝通1989：1）。また張瓊華は、中国の主流文化となっている漢民族が多数を占めているため、民族文化の共生が成立するかどうかは、少数民族文化が伝達・維持されていくか否か、つまり民族的アイデンティティが保持されているか否かを見ることが重要だと論じている（張瓊華1998：213）。

日本人による民族教育の先行研究としては、庄司博史（2003）の少数民族言語政策と漢語普及とのかかわりに注目した研究や、岡本雅亭（1999）の中国の雲南省のタイ族とナシ族の事例研究がある。岡本は、国民統合の目的で導入された少数民族教育が、少数民族側の解釈、対応の違いによって、どのような結果を作り出すのかを論じた。

内モンゴル自治区に関しては、民族教育の問題点について書いたフレルバートル氏の論文に寄せたコメントで、田中克彦氏（1997：91）は、モンゴルなど人口が多い少数民族の言語が危機に瀕しているにもかかわらず、調査、研究はほとんどなされてないことを指摘している（フレルバートル1997）。その指摘から7年が経った今、中国におけるモンゴル語が置かれている状況はさらに悪

くなり、民族学校に通う子供の数がさらに減少しつつある。

田中が指摘するように、内モンゴル自治区では、民族教育についての研究は不十分である。民族教育に関する研究は、雑誌『θbur mongolin sungan humujil』（内モンゴルの教育）に書かれたもののみであり、モンゴル語による資料も非常に少ない。この雑誌には、民族教育における教育方法論、教育方法、方略、学校運営などの研究や報告が出されている。例を挙げると、「授業中どんな風に生徒たちの注目を引くかについて」（ハンカイファ 2001）、「45分間授業の収穫について論じる」（バイフシャン 2001）、「国語の教授方法の改革について」（ヘシュロン 2001）など、教育の方法に関する研究と報告が多く、「モンゴル族の家族が現実にどのような状況になるのか」という視点から民族教育の現状を分析した研究はまだ見られない。

そこで本稿では、文化人類学的な視点から、中国の少数民族地域である内モンゴル自治区で居住するモンゴル族の生活実態を事例として調査分析し、民族教育の低下の実態とその要因を明らかにしたい。具体的には、家庭内におけるモンゴル語使用の実態、親による子供の学校の選択、また子供たちによる選択、親子間のコミュニケーション、漢語の学校を選んだことが本人や家庭に及ぼす影響、また民族アイデンティティに及ぼす影響、それらと関連する社会的背景などに焦点を当てて分析したい。ここでは、民族アイデンティティの概念を、自民族への帰属意識及び自文化への愛着と定義しておく。

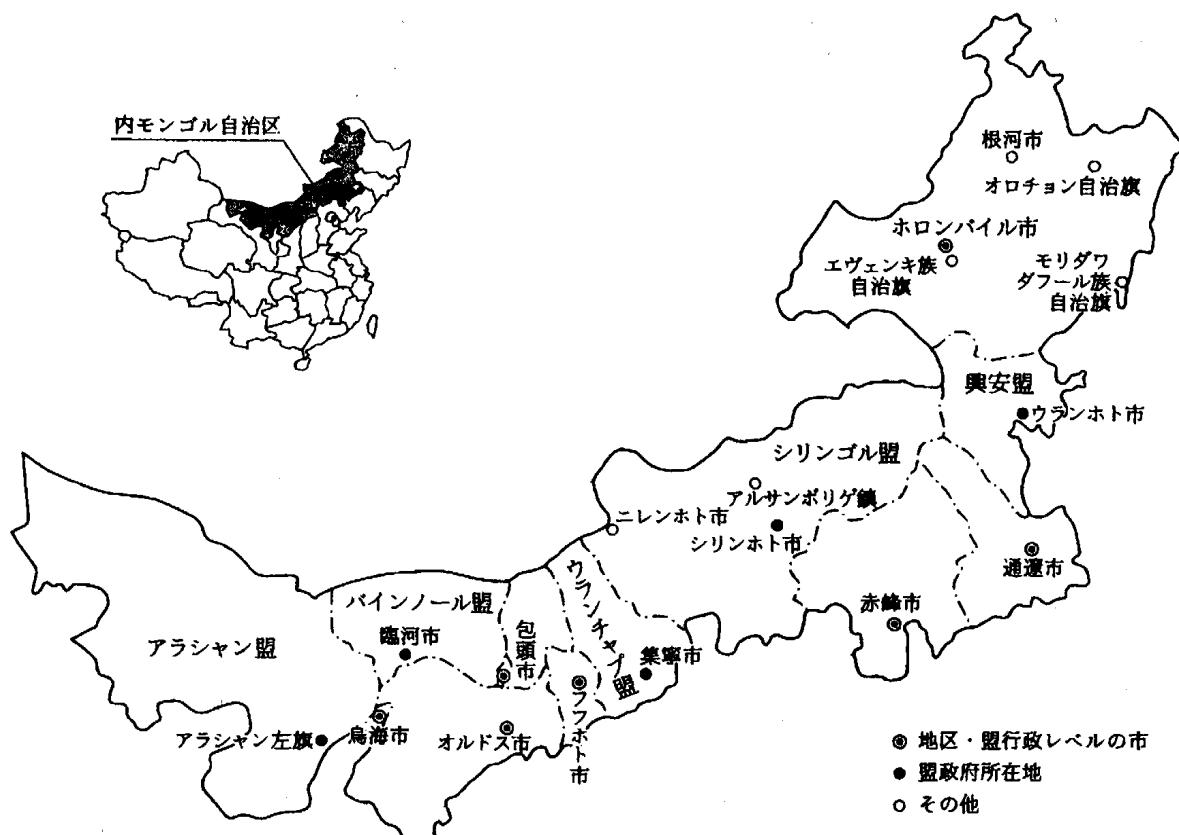
調査の対象は都市に住んでいる家族にした。その理由としては、漢語の学校に子供を送るのは、特に都市に住んでいる世帯に多いからである。ここでは、漢語が使われることが多い社会の中における、モンゴル人の家族に生じる問題に焦点を当てる。そこで、居住地域によって、民族語の重要性が異なるため、ある程度のバリエーションを把握することを目的として、調査対象として都市に住む三世帯を選んだ。

第1章では調査の概要、第2章では三世帯の生活実態、第3章では民族教育の変化の実態に関する客観的なデータ及び就職問題を取り上げ、第2章のミクロな視点から浮かび上がった問題の背景を分析する。

第1章 調査概要

1-1 内モンゴル自治区の概要

内モンゴル自治区（図1）は、中華人民共和国が成立する2年前に樹立された「内モンゴル政府」としてスタートした中国の一行政単位である。内モンゴル自治区は中国の北西部辺境に位置し、北東部はロシア、北部はモンゴル国と境を接している。



内モンゴル自治区行政区区分図

図1 内モンゴル自治区地図（『中国21』2004：2）

自治区は省レベルの行政権限を持つ。現在自治区には、その下位行政単位として7つの市と5つの盟が設けられている。市と盟はいずれも内地の地区レベルと同様な行政権限を持っている。その下位単位には県と旗や市がある¹。自治区政府はフフホトに設けている。自治区の面積は1,183,000平方キロで、中国では新疆ウイグル自治区、チベット自治区に次いで三番目の広さを占める。

¹ 市には盟レベルの市と、その下位の県レベルの市がある。

2003年の統計によると、自治区総人口は23,796,100人で、全国総人口の六十分の一である。漢族18,606,136人の次に、モンゴル族が4,040,441人、満州族486,863人、回族210,622人、朝鮮族23,863人、ダフール族79,195人、エヴェンキ族27,915人、オロンチョン族3998人、チベット族1086人などである。モンゴル族を始め自治区に居住する少数民族の総人口は自治区総人口の20%しか占めてない²。しかしながら、自治区に集中している400万余りのモンゴル族は、中国に居住するモンゴル族総人口の90%以上を占めている。中国では、内モンゴルのほかに、新疆ウイグル自治区、青海省、東北の黒竜江省、吉林省、遼寧省、北京などの地域にもモンゴル族が居住している。

1－2 調査地フフホト市とオルドス市の比較

フフホト市とオルドス市の二つの都市を選んだ理由としては、大都市と地方小都市を比較することが目的である。フフホトは内モンゴル自治区の区都として経済、文化の中心で、ほかの地域より漢化が進んでおり、オルドスは漢化がそれほど進んでいない、まだまだモンゴル民族の民族習慣、文化が残っている地域である。

フフホト（中国語：呼和浩特）は、内モンゴル自治区の直轄市で、現在の人口の多くは漢民族であり、チベット仏教の寺院のほかは、モンゴル特有と思われる要素はあまりない。市の総面積は2054平方キロであり、総人口は1,096,900人である。そこに、モンゴル（約11%）、回、満、エロンチョン、朝鮮など34の民族が共住している。

フフホト市は内モンゴルの区都と言っても、漢族が多数を占めているので、街では聞く言葉はほとんど中国語（漢語）である。こんな環境でモンゴル語を使う機会は当然少なくなってきた。

オルドス市（中国語：鄂尔多斯）は内モンゴル自治区の7つの市の一つであり、市の下位単位には8つの旗（区）を管轄している。総面積は86,381平方キロ、総人口は1,395,000人であり、そのうちモンゴル族は158,000人（総人口の

² 内蒙古統計年鑑 2004.

11%）である。このほかに、回、満、ウイグル、ダブル、エヴンキ族など14の少数民族が共住している³。石炭、天然ガスなどの地下資源が豊富であり、カシミヤ、ウールの産地として有名である。

1-3 調査法と調査対象

筆者は2004年7月、11月に三家族を対象として、フフホト市とオルドス市で聞き取り調査を行った。

ここで取り上げるのはフフホト市一世帯A家とオルドス市の二世帯である。オルドス市の中では、東部が高原地区で漢民族が集中し、主に農業を営む。西部はゴビ化している草原で、牧民が多く住んでおり、東部地域に比べて、牧業が残されて、牧民生活が見られる地域である。本稿では、南部のイジンホロー旗の一世帯B家、西部のウーシン旗の一世帯C家を取り上げる。

三世帯は一人っ子政策が実施されてから生まれた子供を持つ。一つの世帯は子供二人を持つ、ほかの二世帯は一人っ子である。子供たちの漢語の学校に行った理由は色々であり、子供の年齢は10歳から22歳までである。

家族とともに食事、雑談、買い物、散歩など日常生活を共にすることを通して調査した。各家族の一日の生活パターンを中心に、住居、食事、言葉、家族成員の人間関係などに注目した。家族の状況を詳しく知るため、補足調査を電話、メールを通じて行った。

第2章 家族の生活・コミュニケーション・民族語教育 — フィルドワークから

2-1 フフホト市のA家

2-1-1 A家の家族構成と生活

〈家族構成〉

調査対象のA家の家族構成は以下の表1の通りである。

³ 鄂尔多斯簡索 2003.

表1 A家の家族構造と基本的属性

記号	続柄	年齢	学歴	職業	民族	民族教育	言語	家族内 コミュニケーション
A	世帯主	38	大学	記者	モンゴル	小、中、 高、大学	モンゴル語	妻とモンゴル語で、 子供と漢語
A1	妻	31	高校	サービス 業	モンゴル	小、中、高 校	モンゴル語	夫とモンゴル語で、 子供と漢語
A2	長男	8	小学生	学生	モンゴル	受けてい ない	漢語	両親と全部漢語で

Aはオルドス市オトゥグ旗の牧民の家に育てられ、小学校から大学卒業まで、全部モンゴル語の学校で教育を受けた。小さい頃から成績が良くて、ソムの小学校と旗の中学校を通って、内モンゴル師範大学の付属中学の高校クラスに入った。それから内モンゴル大学に進学して、モンゴル言語文学学部で四年間勉強し、卒業後、内モンゴル・テレビ放送局（モンゴル語放送）に勤めた。Aは、仕事では純粋なモンゴル語を話すように要求され、取材、編集など全ての仕事はモンゴル語で行う。それはフフホト市の数少ないモンゴル語と関係ある仕事の一つである。Aはテレビ局に勤いてから色々な賞をもらって、とても優秀な記者である。ずっとモンゴル語で教育を受けてきたAは漢語をあまり話さない、また仕事でもほとんどモンゴル語を使うため、漢語はなかなか上達しない。

妻のA1はオルドス市イジンホロー旗の牧民の家に育てられ、小学校から高校卒業までモンゴル語の学校を出て、高校卒業後すぐホテルの従業員として勤いた。ホテルはフフホト市政府の管理なので、宿泊客も会議に参加する人や、各政府機関の人たちのため、ホテル側は従業員たちにサービスの質を厳しく要求している。言葉は必ず標準語（漢語）で、丁寧語でと要求してきた。モンゴル学校を出たA1は漢語があまり話せない上に、話していた漢語も方言だったので、仕事を始めた頃は漢語の勉強にかなり苦労した。

A2はフフホト市に生まれ育てられ、現在漢語の小学校の2年生である。朝、夕方に両親が交替で送り迎えしている。朝、夕方は出勤のラッシュのため、一人に行かせるのが心配で、送り迎えしているそうである。

＜住居・食生活・年中行事など＞

A家が住んでいるのは、1999年に入居した90平米の2LDKのテレビ局の社員

住宅である。ビルの中は全てテレビ局の職員が住んでいて、モンゴル人が比較的、ほかの住宅より多い。Aは撮影が好きで、出張で牧区に行く時撮った草原の風景、動物たちの写真が壁に飾られていた。夫婦の部屋には、妻の亡くなつた両親の写真前に線香をあげている。ほかには、別の家庭とは変わらない現代的な家具、電気製品などを並べていた。

A家では、平日は忙しいので、店のほうが便利だから、朝食はほとんど外で食べ、両親のどちらかが息子を学校に送る。最近、フフホト市に、モンゴル風の店がたくさんできて、何でもあるから、家で食べるより便利だと言う。息子も気に入っている。A家の朝食は、モンゴル風料理が多く、ミルクティ、ホーチョル⁴、ボーズ⁵などを良く食べる。

A家の主食はお米と、小麦粉で作った饅頭、麺類である。内モンゴルでよく食べる羊の肉、牛肉などを食べるほかに、炒め物などをよく食べる。実家から、夏に乳製品や、冬に羊の肉と牛肉がよく送られてくる。また、乳製品は、食べたいとき、店に売っているものもよく買って食べる。仕事が忙しい平日は、炒め物が多く、休みの時、お肉の塩茹でなど時間かかる料理を作る。このように、都市に住んでいても、食生活はあまり変わらず、モンゴル料理も作って食べる。

A家は正月のあいさつ、かまどの神を祭る行事などを簡単に行っている。

2-1-2 A家のモンゴル語使用状況及び家族間のコミュニケーション

＜息子A2のモンゴル語とコミュニケーションの現状＞

息子A2は、現在小学2年生であり、漢語の幼稚園に通って、小学校も漢語の学校に行っている。家族とのコミュニケーションは全部漢語で取る。モンゴル語は自分の名前、父、母の呼び方以外ほとんどわからない。両親は息子とは漢語で話して、二人の間はモンゴル語を使う。

⁴ 羊の肉か牛肉を細かくしたものを小麦粉で作った皮で平たく包み、揚げたもの。

⁵ 羊の肉が入った餃子、肉饅のような形のもの、サイズが肉饅より少し小さい。

<父Aの子供の民族語教育等に関する考え方>

父は息子のモンゴル語について次のように語る。息子にモンゴル語を学習させようと思い、モンゴル語学習のため、休暇を利用し息子を実家に預けた。実家にはAの両親とAの弟の家族が一緒に住み、家族全員、近所の人たちもモンゴル語を話す。そんな環境にいると息子がモンゴル語をだんだん覚えられると思って預けたが、三日も経たず帰ってきて、それ以来、息子は実家に行かなくなった。息子には、モンゴル語と漢語両方ができるように望んでいるが、現在の状況は、モンゴル語は聞いても分からぬ状態である。

Aは出張が多く、家にいる時間はとても少ない。二人の時間を増やさないと、息子との距離をもたらすかもしれない。息子との交流は全て漢語で行われるが、Aの漢語がなかなか上達しない状態であり、息子のA2はモンゴル語がぜんぜん分からぬので、努力しないと息子とのコミュニケーションは取れなくなると心配している。家にいる時は必ず、息子の送り迎えをし、宿題のチェック⁶をしている。小学校の間はいいけれど、中学、高校になると息子に指導できなくなるかもしれない。幼稚園に通っている頃から、息子は「お父さんの言っている言葉が自分の言っている言葉となんぞ違うの」と疑問を思いながら育った。漢語を綺麗に話せるのが当たり前のことと考えているようだ。

<母A1の子供の民族語教育等に関する考え方>

息子A2を漢語の学校に行かせたのは妻A1の選択であった。妻は次のように考えた。今は人ときちんと漢語で言葉を交わすこともできないと、今の漢化した社会ではやっていけない。モンゴル語は理解できればいい、毎日家で聞いていればだんだん覚えられると思って、幼稚園から漢語の幼稚園にした。また、将来息子には内モンゴルと限らず、全国の各地に活躍できるようになってもらいたいから、漢語を小さいころからきちんと習う必要がある。A1はホテルの受付の仕事をしているが、息子には、自分のような人生を送って欲しくないと思っている。大学まで行かせて、本人が望むなら、修士、博士まで行ってもいい。

⁶ 小学校三年まで、宿題に親のサインをしてもらうことがある。学校によって、異なることもある。

夫の仕事は順調であるが、モンゴル語に関係ある仕事の範囲がとても狭くなり、息子の就職する頃は、社会はどう変わっているか予測がつかないため、漢語の学校に行かせたほうが安心する。

母A1は、息子がモンゴル語に関心がないことについて、次のように語る。息子は、親がモンゴル語で話すと、とても興味なさそうな顔して、自分のことをしてしまった。息子は「何でお父さんの漢語はこんなに駄目なの？」とよく聞く。

A1は夫のAとはモンゴル語で話す。モンゴル語のほうが二人は、自由に表現できる。しかし、息子がいる時は、ほとんど漢語で話す。三人が揃ってテレビを見る時も、漢語の番組が多い。父Aの番組も息子はあまり見ない。調査中も、三人の話の内容は、ほとんど息子の学校のことと、息子の友達の話が多かった。

＜息子A2本人の民族語教育等に関する考え方＞

息子A2は幼稚園から漢語の学校に通って、現在小学校2年生である。学校でも家でも全部漢語を話す。自分はモンゴル人と意識するが、モンゴル語を学習しようとは思わない。自分の周りの人たちが全部漢語を話しているから、何でモンゴル語を学習しなければならないの、と思っている。自分とクラスメートとの違いは民族が違うだけで、ほかには違うものがない、話す言葉、食べるもの、住むところも全部一緒だ。

2-1-3 まとめと分析

A家の食生活、居住、年中行事、付き合い、親の子供の民族教育に対する望み、家族成員の民族アイデンティティを以下にまとめる。

A家は、住居はマンションに居住し、生活は、食事はモンゴルと中国料理の混合である。モンゴルの年中行事や慣習はある程度行っているが、簡単化している。

A家は、親と子供のコミュニケーションは民族語で出来なくなり、漢語を話さなければならない状況になっている。父親は子供に、モンゴル語を分かるようになってもらいたい気持ちが強いが、母親が息子の将来を心配して、漢語の

学校に行かせたのが印象に残った。息子A2現在はモンゴル語に（特に祖父祖母のいる田舎に）対する嫌悪が強い。息子が育てられた家庭と学校では、モンゴル語と接することがないため、モンゴル語に対する理解と認識ができていない。それによって、自民族に対する疎遠感もしてきたと考えられる。学校での勉強、遊び相手とのコミュニケーション、そして家庭でもすべて漢語で、モンゴル語が生活にぜんぜん関係がない。そのため、モンゴル語に無関心になった。

2-2 オルドス市イジンホロー旗のB家

2-2-1 B家の家族構造と生活

＜家族構成＞

調査対象のB家の家族構成は以下の表2の通りである。

表2 B家の家族構造と基本的属性

記号	続柄	年齢	学歴	職業	民族	民族教育	言語	家族内コミュニケーション
B	世帯主	44	大学	公務員	モンゴル	受けていない	仕事で漢語、家庭でモンゴル語を話す	妻とモンゴル語で、娘と両方で
B1	妻	41	大学	医者	モンゴル	小、中、高、専門学校、大学	仕事で漢語が多い、家庭でモンゴル語が多い	夫とモンゴル語で、娘と両方で
B2	長女	15	中学生	学生	モンゴル	幼稚園でうけたが、小学校から漢語の学校	学校で漢語、家庭で両方交えて話す	モンゴル語と漢語を混じえて

B家一家は、オルドス市イジンホロー旗のアラタンシレー鎮（旗政府がある小都市）に暮らしている。アラタンシレー鎮はイジンホロー旗の北部に位置しており、旗政府の所在地である。イジンホロー旗は人口140,556人の中、約9,000人がモンゴル族で、総人口の約6%である⁷。

Bはイジンホロー旗の牧民の家に育てられた。小学校から漢語の学校行って、大学卒業までずっと漢語で授業を受けた。大学卒業後、中学校の教師を何年間し、その後2回の転勤を経て、今のイジンホロー旗の公尼召郷（県または県の

⁷ 鄂尔多斯簡索 2003.

下の区の下の行政区）の書記を務めている。今の仕事に就く前は、家族と一緒に暮らしていたが、今は単身赴任であり、週末に家へ帰って家族と過ごすようにしている。Bは漢語の学校を出たが、モンゴル語はとても流暢に話せて、人との交流は問題ない。しかし、モンゴル語の文章を読んだり、書いたりすることは出来ない。

妻のB1は夫と同じく、牧民の家に育てられた。小学校から専門学校を卒業するまで、モンゴル語で教育を受けた。専門学校を卒業して、イジンホロー旗病院に勤めて、今まで続けている。1990年代の後半に、病院での競争が激しくなり、大学学歴と国家資格が必要になってくると、B1も夜間大学に四年間通って、学位を取った。

娘のB2はアラタンシレー鎮に生まれ育てられた。幼稚園はモンゴル語の幼稚園に行ったが、小学校から漢語の学校行って、中学3年生である。中学1年まで家族と一緒にいたが、中学2年になって、別の学校に転校した。今の学校は家から離れたところにあって、全寮制の私立学校である。

＜住居・食生活・年中行事など＞

B家は今年の夏に、現在の新居に引越ししてきたばかりである。117平米の3LDKのマンションである。以前は庭付きの平屋に住んでいた。B家は現代風に改装して、応接間に立派な金魚鉢を置いてあって、大型の液晶テレビなど電気製品が揃っている。テレビ台の隣にモンゴルで「五畜」（牛、山羊、羊、ラクダ、馬）と言われる家畜の飾り物を置いてある。

夫婦の部屋、長女の部屋、客用の寝室に全部ベッドが設置されている。長女の部屋には、本棚、勉強机、コンピュータなどが置かれ、学生らしい環境である。

台所は全部電気化して、日常生活に欠かせない電気製品は全部揃っている。食器棚に、A家にあったようなモンゴル式の銀のお椀と酒器が入っている。

三人がいる時、家の昼食は中華風炒め物が多い。昼はゆっくり作る時間がないので、炒めのほうが早く便利だからである。夕食は時間がたっぷりあるから煮物、揚げ物、モンゴル風うどん、モンゴル風の肉の入ったお粥などを作る。モンゴル風の羊の肉の塩茹でがBとB1は好きだけれども、娘はあまりすき

ではない。

B家は正月の行事は伝統的なモンゴルのやり方で行って、ハダグ⁸かぎタバコ⁹の交換も行う。

2-2-2 B家のモンゴル語使用状況及び家族間のコミュニケーション

<娘B2のモンゴル語とコミュニケーションの現状>

娘B2は家にいる時は両親とは、モンゴル語と漢語を混じえて話す。電話に出る時、お客様に話をするとき、ほとんど漢語で話す。モンゴル語で話すと人に笑われるかもしれない、自分のモンゴル語に自信がないので、漢語で話したほうが安心だと言う。しかし、祖父、祖母（余り漢語が分からぬ）と田舎から来たお客様にはできるだけモンゴル語で話す。

B2の見るテレビ番組はほとんど漢語の番組である。モンゴル語の番組を見てあまり分からぬから、見ようともしない。モンゴル・テレビは標準語で放送しているから、自分の聞いてきたモンゴル語と相当な違いがあり、あまり分からぬ。

<父のBの子供の民族語教育等に関する考え方>

Bはモンゴル語を勉強したかったが、子供の頃、兄弟が多くて、家の情況もよくないため、遠くにあるモンゴル語学校の寮に住んで通うことができないので、近くにある漢語の学校に家から通ったと語った。娘にはモンゴル語の学校に行って欲しかったが、娘自身は行きたくないから、本人に任せることにした。娘の将来を考えると、漢語の学校のほうがいいかもしれない。今のイジンホロ一旗の様子を見ると、モンゴル語の学校が何時まで続けられるだろうかと心配する人が多くなっているから、娘の選択が正しいかもしれないと言う。

<母B1の子供の民族語教育等に関する考え方>

B1は医学大学の夜間大学でモンゴル語の授業を受けた。モンゴル語で受けると理解しやすい、自分が言いたいものをはっきり表現できる。最も重要なのは、

⁸ 細長い絹布、色は白と青が多い。挨拶のとき両手に持って、目上の人へ渡しながら挨拶の言葉を交す。

⁹ 客に挨拶として使う、鼻に吸い込むタバコ。

試験に合格することだけを目指していたからモンゴル語にした。仕事ではほとんど漢語を使い、また、患者も漢族の人が多いから、漢語をできないと、患者ともコミュニケーションも取れない。学位のためになかつたら、漢語でしっかり習ったほうが、将来の仕事での苦労が少ないかもしないと言う。

母B1は娘を民族学校に送りたかったが、娘が自分から漢語の学校に行くと言ったので、娘の望み通りにした。両方をできたほうが一番いいと思うが、今はモンゴル語は書けなくてもモンゴル語はきちんと話せばいいと思う。

＜娘B2本人の民族教育に関する考え方＞

漢語の学校を選んだのはB2の選択だった。流暢に話せばいいから、文字を学習しようと思ったことはない。自分はモンゴル人と思うかという質問に対しては、「それはもちろんモンゴル人だと思う、父と母はモンゴル人だから、私もモンゴル人」と言っていた。

B2が漢語の学校に行った理由は、親戚の従兄弟の姉、兄（周りの同じ年頃の子ども）がみんな漢語の学校に行ったから自分も行きたかったからである。

B2のクラスには、同じモンゴル族の子供が三人いる。一人は親戚なので、仲がいい、一人は普通のクラスメート関係である。自分たちとほかの漢民族の子供たちと、日常生活で違いを、特に明らかに感じることはない。家に帰ってモンゴル語で話すことを除いたら、ほかにはほとんど一緒であり、家の食事のメニューから、見るテレビ番組、街で交わす言葉などはあまり変わらないので、自分が特別だと思ったことはないと言う。

2-2-3 まとめと分析

B家の食生活、居住、年中行事、付き合い、親の子供の民族教育に対する望み、家族成員の民族アイデンティティを以下にまとめる。

B家はマンションに居住し、食事はモンゴル料理と中国料理の混合である。モンゴルの年中行事や慣習は行っている。

B家は漢民族が集中している都市に住んでいて、モンゴル語をあまり使う機会がない環境の中でも、出来るだけ子供に自分の民族語を学習してほしい、特に父親の自分の実現できなかった道を子供に歩んでもらいたいという気持ちを

強く感じた。

B2はモンゴル語を第二言語とし、普段は漢語を使う。家庭では漢語とモンゴル語を交えて使う。学校では全ての授業を漢語で受けているほかに、外でのコミュニケーションも漢語で行う。

BとB1が家庭で娘にモンゴル語の環境を作り、全部モンゴル語で話す。娘は両方を使って両親とコミュニケーションをとる。娘の流暢でないモンゴル語でも、田舎からきた親戚、特に祖父、祖母と話し合って、親戚付き合いを重視しているのが印象に残った。食生活、居住、風俗習慣の面で変化があっても、民族語で教育を受けていなくても、民族語でコミュニケーションをとることで娘のネットワークが親族の中まで広がった。これが、A家との大きな違いである。

2-3 オルドス市ウーシン旗のC家

2-3-1 C家の家族構成と生活

<家族構成>

調査対象のC家の家族構成は以下の表3の通りである。

表3 C家の家族構成と基本的属性

記号	続柄	年齢	学歴	職業	民族	民族教育	言語	家族内コミュニケーション
C	世帯主	45	専門学校	公務員	モンゴル	小、中、高、専門学校	仕事で漢語、家庭でモンゴル語	モンゴル語
C1	妻	43	大学	公務員	モンゴル	小、中、専門学校、大学	仕事で両方、家庭でモンゴル語	モンゴル語
C2	長女	22	大学在中	学生	モンゴル	小、中、高校、大学(双語班)	学校で両方、家庭でモンゴル語	モンゴル語
C3	長男	17	高校在中	学生	モンゴル	受けていない	学校で漢語、家庭でモンゴル語	モンゴル語

C家はオルドス市ウーシン旗のダブチャグ鎮（旗の政府所在地の小都市）に住んでいる。旗全体は牧業を主に営んでいる。人口構成からみると、漢族の数が多数を占めるが、ウーシン旗オルドス市のモンゴル人人口密度が一番高いところである。ダブチャグ鎮はウーシン旗の中部に位置して、総面積は504.8平方

キロであり、漢民族が多数を、モンゴル族が少数を占めている¹⁰。

Cは妻と同じく、ウーシン旗の牧民の出身である。専門学校を卒業後、政府機関に勤めて、何回かの転勤を経て、今は税務署の副署長を務めている。妻のC1は師範学校を卒業してから小学校の教師8年間して、その後、人大常務委員会（中共人民代表大会常務委員会）に転勤してから、仕事をしながら大学に通って学位を取った。二人ともモンゴル語の学校に行って、最終学歴までモンゴル語で受けた。

長女のC2は地方に生まれて、6歳の時、家族と一緒に引越してきた。幼稚園から高校までモンゴル語学校に通って、大学は師範大学の漢文学部（中国語学部）の双語班（漢語とモンゴル語両方で教育を受けるクラス）で勉強して、今大学三年生である。進路についてはモンゴル語と漢語両方と関係ある仕事が一番望ましいと言っている。モンゴル語だけになると選択の範囲が狭くなり、就職が難しくなり、また大学で勉強した専門の知識を生かしたいと思っていると言っていた。

長男のC3は1歳の時ダブチャグ鎮に来た。幼稚園から漢語の幼稚園に通って、今漢語の高校1年生である。モンゴル語で日常会話は流暢にできて、家族のみんなとはモンゴル語で話す。

＜住居・食生活・年中行事など＞

この居住はC家がダブチャク鎮に、引越しして来るとき、建てたレンガの3LDK庭付きの平屋である。最初家を建てるころは、ほとんど平屋で、周りにあまり住宅が建っていないかったが、今はほとんど空き地がなくなって、歩いて15分ぐらい、家の近くにあった、息子の遊び場（砂）もなくなったと言っていた。ダブチャグ鎮には、ここ数年に、高層ビルが次々と建てられ、大勢の人がマンションを買うか、一戸建てを建てるのが多くなってきた。

調査の時、C家も、三階建ての新築を建てていて、冬に入居する予定と言っていた。C家の居間には、壁の中央にチンギスカンの肖像の絨毯が掛けられていて、上にハダグ（シルクで作られた長い布）が掛けられていた。ほかには、

¹⁰ 鄂尔多斯簡索 2003.

どの家庭にも見られる家具、電気製品が揃っていた。

夫婦の部屋は、寝室と書斎に分けられて、寝室にはオンドルがあって、モンゴル風模様がある絨毯を敷いてあった。書斎には、ほとんどモンゴル語の本と仕事に関する本が、たくさんある。一番目立つのは「三弦」というモンゴルの伝統的な楽器が置いてあった。

子供部屋は、長女の部屋には、ピアノがあって、小学校から習い始めたと言う。本棚には、漢語の小説が多く置かれていた。モンゴル語のもあるが、漢語が圧倒的である。長男の部屋にはコンピュータが置いてある。長男は、スポーツ好きだから、部屋には自分の好きなスポーツ選手の写真とか飾られている。

C家の台所は、母屋と離れて、正門から入ったところにある。通常は天然ガスを使うが、かまども設置されていた。お肉を煮る時は、かまどのほうが美味しいし、また、旧暦の12月の23日、かまどを祭る習慣があるから、かまどがないと困ると言う。食器棚には、モンゴル式の木のお茶碗セット、お皿と銀のお椀があった。普通はあまり使わないが、お客様が来る時や、お正月の時使うと言っていた。

朝ご飯はミルクティと乳製品（チーズなどモンゴル人の食卓によく見られるもの）など、ボーフ¹¹、ホーショルが出ていた。朝食をしながら4人がモンゴル語で話して、両親の仕事のこと、二人の子供の学校のこと、昨夜の見たテレビドラマの話、ニュースなど、とても楽しそうに世間話していた。長男のC3もとても流暢にモンゴル語で話していた。

C1と夫のCの普通の生活パターンはほとんど同じくパターンであり、仕事での付き合いとか、出張、残業がなければ、二人の家を出る時間、帰宅時間はほぼ一緒である。

C家は正月の挨拶、かまどの神を祭るなど年中行事を欠かさず行って、子供にも教えている。

¹¹ 小麦粉と砂糖とバタに水を加えて、よくこねて、かたちを取ってから、羊、牛の油で揚げたお菓子。

2-3-2 C家のモンゴル語使用状況及び家族間のコミュニケーション

<息子C3のモンゴル語とコミュニケーションの現状>

C3は家庭内ではモンゴル語で話して、外ではほとんど漢語で話す。学校の友達以外には、モンゴル族の友達は余りいないので、友たちはほとんど漢語で話すが、自分はいつも自分がモンゴル族だと言うと母親が言っていた。自分でモンゴル語を学習しようと思っている。名前や、簡単な文字なら書けるが、本を読んだり、文章を書いたりする能力は持っていない。しかし、日常生活ではモンゴル語を自由に操れる。

<父Cの息子の民族語教育に等に関する考え方>

Cが勤めている税務署の署員のうち、モンゴル族と漢民族の割合はほぼ一緒であるが、モンゴル族同士の間のコミュニケーション以外は、モンゴル語は耳にしない。Cの仕事関係では、モンゴル語はほとんど使わない。かなりの漢語の能力を持っていないと仕事をやって行くのがなかなか難しい。

息子の民族語教育について次のように語る。自分たちの歩んできた道を見て、漢語をよく身につけないと仕事は大変だと思う。どうしても子供の将来を考えると、漢語の学校に送るほうが、有利と思って、漢語の学校に決めた。

<母C1の息子の民族語教育等に関する考え方>

母C1が息子C3を漢語の学校に通わせた理由は以下の通りである。ちょうど息子が幼稚園に入る時、新しく引越ししたところの近くに、漢語の幼稚園しかなかったので、とりあえず漢語の幼稚園に行かせてみようと思った。息子の成長するにつれ、将来を考え、今まま漢語の行かせようと決めた。モンゴル家庭にいるから、言葉と民族の習慣は、見ていて、だんだん身につけることが出来るだろうと思った。

息子が小学校に通い始めた頃は、成績がよくないので、たぶん授業内容を十分に理解できていないかも知れないと心配していた。ほかの子供たちについていけないかも知れないと心配して、学校から帰ってきたら息子と一緒に補習し、自分の選択は正しいかどうかと、自問した。

<娘C2の弟の民族語教育等に関する考え方>

C2は弟が漢語の学校に入っていることについて、次のように語った。学習す

るものにはあまり違いがないと思う。モンゴル語の学校と漢語の学校の教科書内容はほとんど一緒であり、大学入学試験も一緒である。漢語の学校では、自分の民族について教育を受けることができないのが残念だと思う。弟がモンゴル語を読めないから、自分の民族の文化、歴史などを自分の民族語でどのように書かれているのを読めないのが残念だ。

<息子C3本人の民族語教育等に関する考え方>

C3に漢語の学校については、漢語の学校とモンゴル語の学校で習う内容はほぼ一緒だと思う。学校の設備、教師陣、奨学金制度などからみると自分の学校が姉の学校より条件がいい、また進学の道がモンゴル語の学校より広いと思うが、どちらがいいどちらが悪いとは言いえない。ただ自分に姉より一つ足りないのはモンゴル語で書いたり、読んだりすることができないことがあると語った。日常会話は大丈夫だが、テレビのニュースとか、あまりの専門的な言葉は分かり難くなる、ぜんぜん分からぬ時もあると語った。モンゴル語が習いたい。

2-3-3　まとめと分析

C家の食生活、居住、年中行事、付き合い、親の子供の民族教育に対する望み、家族成員の民族アイデンティティを以下にまとめる。

C家は正月の行事を伝統的にやってハダグ、かぎタバコの交換も行う。かまどの神を祭る習慣もやり続けている。

C家は都市に生活しながら、モンゴル民族の生活習慣を持ち、とても仲良く暮らしている。二人の子供は両親を尊敬している。モンゴル族の年中行事一つも欠かさずにやり、民族文化を守り続けている。

このような環境の中で、C3はモンゴル語、モンゴルの礼儀、習慣、文化を自然に身につけた。また、民族教育を受けていないが、自分はモンゴル族と思い、モンゴル文化への愛着を持っている。

第3章 モンゴル語学校の現状と就職問題

3-1 モンゴル語学校の歩んできた道

モンゴル族は中国の55の少数民族の中で、幼稚園から大学までのモンゴル語

による教育システムを形成し、維持してきた少数民族の一つである。また、「八協」¹²という組織を通じて、内モンゴル自治区以外のモンゴル人が居住しているところまで、「モンゴル文字」の規範化、地域を横断するモンゴル語教育の普及にも大きな成果を挙げてきた（舍那木吉拉2000：3）。

1949年の中国の建国後、共産党は少数民族言語、文化を保護し、発展させる政策を取った。その結果、内モンゴルにおいて民族言語、文化、民族教育の黄金時代とも言われるよう、めざましい発展を遂げたのである。このように、内モンゴルでは1950年代から自治区全域においてモンゴル語による学校教育制度が整い、民族学校が次第に増えてきた。それに伴い、モンゴル語の教科書をはじめ、モンゴル語の出版物も増大した。

しかし、こうした状況は1960年代後半から始まる「文化大革命」の10年間に大きく後退し、民族文化、教育の破壊が徹底した。それ以降、「文化大革命」の過ち正し補償すると言う意味合いもあり、1980年代の初期から内モンゴルにとって、1950年代次ぐ第二次の民族言語文化、民族教育の発展の時期を迎えた。それにより、内モンゴルでは民族語による教育が全面復活しただけでなく、新設の学校も大幅に増え、それまでになかったモンゴル語による専門学校や大学の講座も設けられ、モンゴル人生徒の進学率が著しく増えた。

例えば、1990年の段階では、モンゴル語による講座をもつ専門学校と大学がそれぞれ30と10校になった。こうした状況は民族語による出版物にも、大きな影響を与えた。その結果、モンゴル語による、教材の種類は350種にのぼり、出版部数は650万冊に達した。それ以外の出版物を含め、1989年末に内モンゴル自治区の六つの出版社から12,584種類のモンゴル語出版物が発行された（フレルバートル1997：104）。

しかし、1990年代以来、市場経済の原理が社会全体に導入されたことにより、内モンゴルにおけるモンゴル民族の民族教育の状況は大きく変わってきた。自治区の各地で、学歴化、競争化の風潮の影響を受けて、少数民族の子供の中で、

¹² 八協とは、内モンゴル自治区、新疆ウイグル自治区、青海省、甘粛省、寧夏回族自治区、吉林省、黒龍江省、河北省と雲南省の「モンゴル語文工作委員会」によって構成される「全国モンゴル語文工作委員会」を指す。

漢語学校、あるいは、漢語クラスに入る例が増え、モンゴル教師のポストが減っている。廃止された学校に勤めていた教師たちの半分以上の人々は再就職できていない（政府からの支給される救済金で生活している）。

表4 1999年～2001年の内モンゴル自治区各地の民族幼稚園、小・中学校の数

地 域	1999年	2000年	2001年	地 域	1999年	2000年	2001年
フフホト市	55	55	44	通遼市	1029	953	829
包頭市	29	28	29	シリンゴル盟	160	157	137
烏海市	2	2	2	ウランチャブ盟	28	27	25
赤峰市	395	386	310	オルドス市	74	70	65
ホロンバイル市	226	221	176	バインノール盟	29	35	35
興安盟	602	503	370	アラシャン盟	32	31	27

出所：内モンゴル自治区教育委員会（思沁夫2004：155）

表4から分かるように、包頭市、烏海市、とバインノール盟を除いて、ほかの全ての地域の民族学校は減少している。また、通遼市、興安盟や赤峰市などモンゴル人口が多い地域の民族学校の減少が著しいである。

表5 1999年～2001年の内モンゴル自治区民族幼稚園、小・中学校の数

年度	幼稚園	小学校	中学校
1999		3210	408
2001	99	1626	300

出所：内モンゴル自治区教育委員会（思沁夫2004：164）

注：2001年の幼稚園の正確な数は分からぬ

表5から分かるように、1999年から2001年までの間、小学校が半分ぐらいに減って、中学校も四分の一がなくなった。また、「内蒙古教育出版社」の統計によると、内モンゴル自治区モンゴル語小学校生徒向けのモンゴル語教材購入総数は、1990年の64,570冊から2003年の25,749冊と半数以下に減少してきた。

3-2 モンゴル語学校の卒業生の就職問題

内モンゴル自治区はモンゴル人の自治地域であるが、人口構成上、モンゴル人は少数派である。総人口の17%を占めるにすぎない。

漢族が多数を占める人口構造が漢化の重要な要因であるが、ここで強調したいのは、1980年代後半、特に1990年代以降の市場経済化、情報化による、急速な漢語化、漢字化の進行である。ここで使用する「漢化」という言葉は、民族

地域における漢語の使用範囲の拡大、浸透を主に意味する。それが、モンゴル語の使用範囲、市場を大きく縮小させ、それが原因となって、モンゴル語で受けた学生の就職先が減りつつあると考えられる。例えば、かつて党政府機関、事業単位、さらに一部分の国営企業まで、モンゴル語ができる幹部の配置、漢語の文書を翻訳する翻訳課が自治区レベルから下位行政単位まであったが、ほとんどの地域単位からこの仕事は消えた。

また、モンゴル語による放送、出版など「モンゴル文化」産業などは、多くのモンゴル学生を吸収できる、モンゴル学生にとって重要な就職先であった。しかし、市場化、情報化によって、今この産業は衰退の危機に直面している。内モンゴル自治区のテレビ局が放送しているモンゴル語テレビ番組は一つだけである。フフホト市で見られるモンゴル語のテレビ番組は2つぐらいに対して、漢語の番組は40ぐらいである。

さらに、市場経済の発展によって、漢語によるテレビ、インターネットの普及、漢字の印刷物の出版市場の独占状態は、モンゴル文化産業の衰退を招いている。内モンゴルで最大の「蒙文印刷場」(印刷会社)などの倒産からもその状況を見ることが出来る。特に地方では、赤字を抱えるところほとんどで、財政面でモンゴル文化産業を支えることが出来なくなっている。

またここ数年の卒業生の特徴としては、事業単位、企業、進学、自治区以外のところでの就職が増えている。就職自由化以降の大学全体の就職は、政府機関、事業単位、研究機関を中心から、企業、進学、事業単位中心へと変化し、北京、天津、上海や沿海地域で職を探す学生が増えている特徴が見られる。表6は、2004年度の内モンゴル大学卒業生の就職状況である。

表6 2004年内モンゴル大学卒業生の就職状況

就職先	政府機関	事業単位	企業	進学	自治区外の就職	一次就職人数合計
人数	139	225	269	347	939	1919

出所：内モンゴル大学就職指導センター

しかし、モンゴル語で卒業した学生の就職には、このような特徴はほとんど見られない。過去と比べて、進学と留学が若干増えただけであり、就職先は依然政府機関、メディア関係、軍関係が中心である。また、専門でモンゴル言

語・文学、歴史などを中心に勉強した学生の就職率が低い上、失業状態も長くなっている。学歴社会に突入した中国では、高学歴は就職に有利と言われているが、モンゴル語で勉強しただけで不当な扱いを受けるケースが多いのが実情である。

さらに、就職先の減少と「拡招」（大学募集定員の増加）が就職率の低下を招いている。もともと政府機関、軍の機関、一部の事業単位、進学といった非常に限られた就職先が、漢化によって減少している。また、政府機関の定員削減（減編）、「公務員化管理」への移行（公務員試験を通じて採用することを意味するが、試験は圧倒的に漢語が多いため、モンゴル学生には不利である）などは、さらにモンゴル学生の就職に影響している。一方、大学を卒業するモンゴル学生が年々増えており、これによって、就職率が低下するという結果がもたらされている。

民族学生の進学率を上げ、少数民族出身の幹部を養成するなどの目的で、少数民族学生に対して、これまでさまざまな優遇措置が実施されてきた。しかし、それらの優遇措置は入学試験や幹部になるなどの場合に、漢民族に比べて、少数民族出身を優遇するものであり、ここでは少数民族の言語はほとんど配慮されていないのが現実である。そのため、同じ少数民族出身でも、漢語で教育を受けたほうが就職などには有利である。また、法律や制度の不備によって、少数民族、特に少数民族言語で教育を受けた学生が就職の際にさまざまな差別を受けた報告されている。

おわりに

本論文では、内モンゴル自治区のフフホト市とオルドス市に居住している三世帯を事例として取り上げ、その日常生活、使用言語、民族アイデンティティなどの実態をミクロな視点から分析した。三世帯を比較すると、社会環境、子供の学校教育言語、生活使用言語、親子間の民族アイデンティティの断絶などの関連性が明らかに存在する（表7）。

当然の結果とも言えるが、子供の生活使用言語や民族アイデンティティが周辺の言語・文化的な環境に大きく影響されることが明らかである。とくにフフ

表7 三世帯を通してみた社会環境、言語、文化の変化の関連性

世帯	地域	社会環境	子供の学校 教育言語	子供の生活 使用言語	親子間の民族アイ デンティティ断絶
A	フフホト市	周辺はすでに漢化され、一部を除いて、民族言語の使用がない。	漢語	漢語	明らかにある
B	オルドス市 イジンホロー旗	周辺は主として農耕地域で、市内は民族言語を耳にすることが少ない。	漢語	漢語、モンゴル語は少し	少しある
C	オルドス市 ウーシン旗	周辺は遊牧地域で、モンゴル語は市内では少ないが、郊外ではよく耳にする。	娘は民族語、 息子は漢語	漢語とモンゴル語	あまりない

ホト市（A家）の場合は、父親は漢語が不得意で、夫婦間の会話がモンゴル語で行われているにも関わらず、子供はモンゴル語を全く習得せず、親子間のコミュニケーションに大きな支障が出ている。子供母語を失うことにより、親子の間で文化的な断絶、民族アイデンティティの断絶が生じ、大きな問題となっているのである。

イジンホロー旗（B家）とウーシン旗（C家）の事例では、漢語・モンゴル語の混合化が見られた。イジンホロー旗の市内の環境はフフホトに近いが、それでも漢語・モンゴル語の混合化が続けられたのは、郊外にモンゴル的な文化が残っていることがあげられる。ウーシン旗の場合は、周辺に遊牧地域があり、子供たちが親族などとの交流からモンゴル文化と言語に直接ふれる機会が日常的に存在することが大きいと考えられる。

一方、社会環境の違いにかかわらず、三世帯の共通点として言えることは、親の世代はほとんど民族教育を受けているが、子供の世代はほとんど漢語による教育に移行していることである。少なくとも都市部においては、モンゴル語は教育言語としての地位を急激に失いつつあり、多かれ少なかれ親子の断絶を引き起こしていると言える。

三世帯共に漢語による子供の教育が選択されている。その理由としては、親の立場から現状を見て、子供の就職に有利になるように、そしてまた子供の将来を考え、内モンゴル自治区に限らずもっと広い世界で活躍して欲しい、激しい競争を勝ち抜いて欲しいという願いが語られる。一方で、親としてはモンゴ

ルの文化やモンゴル語も身につけて欲しいと願っているが、現実的には、子供の学校は漢語学校が選択されているのである。

子供の立場からは、周りの子供たちがみな漢語の学校に行くからという理由が多い。ウーシン旗（C家）の場合は、姉はモンゴル語の学校を選択し、弟は漢語の学校を選択している。弟の方もモンゴル語を学習したいという気持ちもあり、バイリンガルへの志向がある。

以上のように、実際に都市部におけるモンゴル族の家族の生活実態として、民族語による学校教育が急速に減少している現状、それによる親子間のコミュニケーションや民族アイデンティティへの影響が明らかになった。また、モンゴル族自らが漢語学校を自主的に選択する理由もある程度明らかになった。わずかに三世帯という限定された調査対象ではあるが、中国の少数民族教育の現状を、このように家族の生活実態に焦点を当てて論じたものはこれまでない。その点で、民族教育の現状を家族の生活実態というミクロな視点から論じることに一定の意義があると思うが、より客観的なマクロな視点と結びつけて論じることで、その意義は一層大きくなると思う。そこで、以下では、前章で述べたモンゴル民族教育の変化の実態とその社会的背景を纏め、以上に述べたミクロな視点と結びつけて論じたい。

中国の社会は「改革開放」政策実施の前と後で大きく変化した。特に1997年から、「国家包分配」（国が就職先を保護する）制度が廃棄され、就職における選択の自由が拡大した。親の世代は、国家に就職を統制され、就職の選択の自由はなかったが、民族言語の維持継承という点ではより安定していたと言えよう。本論文で取り上げた都市部のモンゴル族世帯の場合でも、親の世代では、ほとんどが民族言語による教育を受けている。ただし、就職に民族言語が活かされているかどうかは、事例によって異なっている。

「改革開放」政策の後、学校や就職などに関する国の統制が弱まったが、将来に対する個人の責任と不安が大きくなかった。職業の自由化により、漢語ができることが、激しい競争に勝つための必須の手段になってきた。さらに、モンゴル語を必要とする公務員の就職先が減っているため、モンゴル語による学校教育は不利になっている。

「改革開放」政策以後の市場経済の発展により、就職の範囲が一層広がり、職業による収入の格差が大きくなつた。また、親の世代では内モンゴル自治区から出ることは考えにくかったが、子供の世代では、自治区外に出ることも普通になっている。そのため、現在の子供の世代では、競争が激化し、漢語による教育がより重視されるようになっている。

政策としては、国は「民族平等」という理念を掲げ、中国は統一した多民族国家であると強調している。しかし、現実には多文化主義¹³は危機に直面している。以下では、この内モンゴルの現状を「リベラル多元主義」と「コーポレイト多元主義」の概念を用いて分析してみる。「リベラル多元主義」とは公的空間では当該社会の価値基準や言語を維持するが、私的空间では各人種・民族集団の文化や価値基準を認めることであり、「コーポレイト多元主義」は、私的空间だけでなく、公的空間においても複数の文化や言語の使用を保障する。つまり「コーポレイト多元主義」はより厳密な意味での多文化主義である¹⁴。この場合、人種・民族集団の存在が公的に認知されるため、政策決定や権力の再配分にも関係が生じ、民族は文化的単位のみならず、政治的単位にもなる。

中国の国家の政策としては、「コーポレイト多元主義」をとっていると言える。自治区において、複数の文化や言語の使用を保障している。建国後、共産党は少数民族言語、文化を保護し、発展させる政策を取つた。内モンゴルでは1950年代から自治区全域においてモンゴル語による学校教育制度が整い、民族学校が次第に増えてきた。それに伴い、モンゴル語の教科書をはじめ、モンゴル語の出版物も増大した。自治区レベルから下位行政まで、党政府機関、事業単位、さらに一部分の国営企業まで、モンゴル語ができる幹部を配置し、漢語の公文書を翻訳する翻訳課があった。また、モンゴル語による放送、出版など「モンゴル文化」産業などを重視して、各盟と市にモンゴル放送局と出版社があった。

¹³ 梶田によれば、多文化主義とは「ひとつの社会の内部において複数の文化の共存を是とし、文化の共存がもたらすプラス面を積極的に評価しようとする主張ないしは運動」（梶田孝道1996a：67）

¹⁴ 梶田がM・ゴードンの概念を用いて纏めている（梶田孝道1996a：80-82）

さらに、民族学院を設置して、少数民族幹部（国家、地方公務員、共産党役員など）を養成・訓練している。入学試験や採用試験における「優遇」措置が設けられてきた。地域の状況を考慮して少数民族の受験生の合格点を下げている。

「コーポレイト多元主義」は、個人に機会の平等を保障するだけでなく、多民族間の結果の平等を志向するものだともされ、「積極的差別是正措置」が取られることもある。その点においても、中国政府は政策としては「コーポレイト多元主義」を取ってきたと言えよう。

しかし現実には、市場経済化の流れの中で、民族語教育は衰退の一途を辿りつつある。「積極的差別是正措置」も、採用試験で少数民族が優遇されるといっても、それは使用言語に関係なく、逆に、漢語の学校に行く人に有利になる。結果としては、民族教育よりもむしろ漢語教育を助長することにつながっている。

以上のように、市場原理の元で、政策が現実に反映されないという厳しい状況が生じていると言えよう。では、モンゴル文化と言語は、近い将来において消滅し、漢文化に同化せざるを得ないのでしょうか。筆者は必ずしもそうとはならないと考えている。

人々は伝統文化に愛着を持ち続けていて、本論文で明らかになったように、都市部でも、親たちはモンゴル語とモンゴル文化を子供に継承することを願っている。筆者の個人的な体験としても、生活の中で、昔は着ることのなかったモンゴル服を多くの人が着るようになったことや、客を歓迎するときのモンゴル的な慣習が復活してきたことが印象に残っている。

このような現象は経済の発展や観光化が進むなかでむしろ起こっている。世界のさまざまな場所で、経済発展やグローバル化が進行する中で、「伝統文化」を再編して復活するという現象が多くみられる。例えば、日本における、横浜、神戸、長崎などにおいて、中国との国交正常化を契機に、中国語を話せなくなつた華僑の第三世代が中心になって、中華街を復活し、伝統文化を「再創造」した、という事例が報告されている（王維2001）。マイノリティの「伝統」は、単に民族アイデンティティや自文化への愛着というだけでなく、経済的にも有

利に働くと分析されている。移民の場合、ホスト社会において、主流文化を身につけると共にマイノリティの文化を維持することが「文化資本」として有利に働くと考察されている¹⁵。

以上のような問題は「ニュー・エスニシティ」というキーワードで捉えられ、近年に移民社会を対象にしたエスニシティ¹⁶研究において盛んになっている。本論文はこのような視点から考察することはできなかったが、少数民族の居住地域に少数民族が移住してきたモンゴル自治区のように地域でも適用が可能だと考える。今後、このような視点を取り入れながら、民族教育と伝統文化の継承のテーマを一層深めていきたい。

参考文献

- 愛知大学現代中国学会（編） 2004 「『内モンゴルはいま』の特集にあたって」『中国21』 風媒社、2-3頁
- 綾部恒雄 1995 「エスニシティの概念と定義」 綾部恒雄（編）『文化人類学2』 アカデミア出版社、8-19頁
- 綾部恒雄 1993 『現代社会のエスニシティ』 弘文堂
- アラタンプラグ（編） 2001 『sin zuunee surgan humujilin uglelin songmal（新世紀の教育論文集）』 内蒙古自民出版社（モンゴル語）
- 内蒙古統計局（編） 2004 『内蒙古統計年鑑2004』 中国統計出版社
- 内蒙古教育出版社（編） 2004a 『内蒙古自治区近10年蒙古語授課小学訂購課本情況』 内蒙古教育出版社

¹⁵ 「文化資本」という概念はピエール・ブルデューが提示した。ブルデューは「身体化された様態」「客体化された様態」「制度化された様態」に分類している。（ブルデュー 1979：18-28）

¹⁶ 「エスニシティ」の概念は、梶田は「文化・出身・習俗・出身地域などの点で異なるエスニック集団への帰属の状態ないしは帰属の意思」と定義している（梶田孝道1996 b：246）。綾部は「エスニック・グループが表出する性格の総体」と定義している（綾部恒夫1993：13）。「エスニック・グループ」とは、綾部によれば、国民国家の枠組みの中で、他の同種の集団との相互行為的状況下にありながら、なお、固有の伝統文化と我々意識を共有している人々による集団であり、民族という概念が静的であるとすれば、エスニック・グループという概念は動的であるといえる（前掲書）。中国内モンゴル自治区におけるモンゴル族について、本論文では民族として論じたが、このような、エスニック・グループとして論じることも有効であると思う。

- 内蒙古教育出版社（編） 2004b『θ bur mongolin surgan humujil（内モンゴル教育）』年刊修正版、内蒙古教育出版社（モンゴル語）
- 内蒙古大学モンゴル学院（編） 2003『erdem sinjilgeenee uglel（学会論文集）』13期、内モンゴル大学出版社（モンゴル語）
- 王維 2001『日本華僑における伝統の再編とエスニシティ — 祭祀と芸能を中心に』風饗社
- 王錫宏 1998 「中国における少数民族教育の実態及び課題」『東京大学大学院教育研究科紀要』第38巻 237—245頁
- 王亜新 2000「中国の少数民族地域における言語教育政策と現状」『アジア・アフリカ研究所研究年報』35号 78—88頁
- 小川佳万 2001『社会主义中国における少数民族教育』東信堂
- 小川佳万 1994 「中国における少数民族高等教育政策 — 「優遇」と「統制」のメカニズム」『比較教育学研究』20号 93—104頁
- 岡本雅亨 1999『中国少数民族政策と言語政策』社会評論社
- 梶田孝道 1996a「「多文化主義」をめぐる論争点 — 概念の明確化のために」初瀬龍平（編）『エスニシティと多文化主義』同文館、67—101頁
- 梶田孝道 1996b「『民族・国家・エスニシティ』論の現状と課題」井上俊他（編）『岩波講座 現代社会学24 民族・国家・エスニシティ』岩波書店、245—263頁
- 格根圖亞（ゲゲントヤ） 2002「中国内モンゴル自治区フフホト市の商品化される民族文化に関する調査」『神戸大学表現文化研究会』2(1), 63—69頁
- 舍那木吉拉（シャナムザラ） 2000『中国民族言語工作的創挙—蒙古語文「八協」工作二十年回顧』遼寧民族出版社
- 思沁夫（スチンフ） 2004「「蒙生」の就職について — 内モンゴルの大学の事例より」愛知大学現代中国学会（編）『中国21』風媒社、151—166頁
- 張瓊華 2001「中国における言語教育と少数民族集団の選択」『東京大学大学院教育研究科紀要』第41巻 2001 210—224頁
- 中国社会科学院民族研究所・国家民族事務委員会文化宣伝司（編）1994『中国少数民族語言使用情況』中国藏学出版社
- 中国内モンゴル自治区市民政局（編）2003『鄂爾多斯簡索』哈尔滨地図出版社
- バイフシャン 2001「45分間授業の収穫について論じる」アラタンブラグ（編）2001『sin zuunee surgan humujilin uglelin songmal（新世紀の教育論文集）』内蒙古自治区出版社（モンゴル語）179—181頁
- ハンカイファ 2001「授業中にどんな風に生徒たちの注目をひくかについて」アラタンブラグ（編） 2001『sin zuunee surgan humujilin uglelin songmal（新世紀の教育論文

- 集)】内蒙古自民出版社（モンゴル語）27-28頁
初瀬龍平（編）1996『エスニシティと多文化主義』同文館
費孝通 1989『中華民族の多元一体構造』中華民族学院出版社
フフバートル 2002「内モンゴルにおける現代モンゴル語研究の問題と課題」『モンゴル研究論集』6号、東北大学東北アジア研究センター、145頁
フフバートル 1999『「内蒙古」という概念の政治性（ことば社会）』三元社
フレルバートル 1997『内モンゴル自治区の民族教育をめぐる諸問題』田中克彦他（編）
『言語・国家、そして権力』（ライブラ相関社会学 四）新世社、91-105頁
ブルデュー、ピエール（福井憲彦訳） 1979年「文化資本の三つの姿」『actes』1（日本エーティースクール出版社）、18-28頁
ヘシュロン 2001「国語の教授方法について」アラタンブラグ（編） 2001『sin zuunee surgan humujilin uglelin songmal（新世紀の教育論文集）』内蒙古自民出版社（モンゴル語）286-288頁
毛利和子 1999『周辺からの中国 民族問題と国家』東京大学出版会
毛利和子（編）2001『現代中国の構造変動—中華世界のアイデンティティの変容と再創造』7巻 東京大学出版会

*モンゴル文字で書かれた文献はアルファベットで表示し、日本語訳を付した。